

大河家方言初探

小 高 裕 次

1.はじめに

1.1.大河家鎮について

大河家鎮は甘肅省積石山保安族東郷族撒拉族自治県(以下、積石山県と呼ぶ)の一地区である。同自治県の位置および地勢については、『積石山保安族東郷族撒拉族自治県志(以下、『県誌』と呼ぶ)』によって以下のように説明されている^{注1}。

積石山保安族東郷族撒拉族自治県は、黄河上流、臨夏回族自治州の西部、黄土高原と青蔵高原が交わるところに位置し、温帯寒冷地区に属する。東南は臨夏県と相連なり、西は青海省循化县と境を接し、北は黄河を隔てて青海省民和県と相望み、東北は黄河を以て永靖県との境となす。東経 102°41'～103°06'、北緯 35°34'～ 35°42'、海拔 1735 メートル～ 4309 メートル、東西の長さ 37 キロメートル、南北の幅 33 キロメートル、総面積 909.97 平方キロメートル。

大河家鎮は同県の西北部・黄河沿いの地域にある。青海省民和県とは大河家黄河大橋橋(1988年完成)で結ばれており、県と青海省を結ぶ交通の要衝である。同鎮は、鎮の中心である大河家地区と、保安族が集中して居住することで知られる大墩・梅坡・甘河灘の三地区を合わせた計四地区からなる。

^{注1} 積石山保安族東郷族撒拉族自治県志編纂委員会編(1998)p.1。日本語訳は著者。

大河家鎮の特徴は少数民族が多数を占める点である。約 13,000 の人口の半分近くを占める保安族を筆頭に、回族・撒拉族・東郷族のイスラム教を信仰する少数民族が全体の四分之三を占め、仏教を信仰する土族も一割弱存在する。漢族は人口の15%弱を占めるに過ぎない^{注2}。

大河家鎮住民の言語使用状況は、おおむね次のように二分される。それぞれの民族語と現地の漢語方言のバイリンガルと、現地漢語方言のみを話す住民である。民族間相互の意思疎通には現地漢語方言が使用される。

大河家地区を含む積石山県の漢語方言は、侯(1997)の分類に従えば北方官話区西北次方言大夏河片に属する。侯(前掲書)では甘肅省漢語方言概況として甘肅省の他の漢語方言とともに積石山方言の説明も見られる^{注3}。また、『県誌』中には諺語・歇后語・謎語とともに 657 項目にわたる積石山方言の語彙が紹介されているのだが、残念なことに音声表記はない^{注4}。

バイリンガル住民には大墩や甘河灘のように地区内では民族語だけで生活できる人々の他、諸民族が雑居する大河家地区のように家庭内では民族語、家の外では漢語という住民もいる。漢族は言うまでもなく漢語話者であるが、大河家地区では少数民族であっても民族語を話せない住民も多い。梅坡地区の保安族は、同地区に移住する以前、青海省に居住していた段階で民族語を失ってい

^{注2} 以上のデータはインフォーマントの孔令熙氏に口頭でうかがったものである。積石山県全体の民族の内訳は、1988年のデータで総人口 185,918 人中保安族 9,026 人・東郷族 11,845 人・撒拉族 4,229 人・漢族 93,430 人・回族 64,544 人・土族 2,697 人・蔵族 129 人・維吾爾族 1 人・蒙古族 4 人・哈薩克族 13 人(『県誌』に拠る)。

^{注3} 侯(1997) pp38-49。

^{注4} 『県誌』 pp.463-481。

る^{注 5}。

1.2.本稿の目的

筆者は、2000年8月に大河家鎮を訪問した。その際、地元共産党幹部の孔令熙氏から現地の漢語について興味深い説明を受けた。同鎮の人々が話す漢語は、民族毎に異なっており、その相違は、バイリンガル住民だけでなく、漢語のみを話す住民にも見られるというのである。

このことに興味を持った筆者は、氏の説明を裏付けるべく、2002年8月に同鎮を再訪した際、漢語を母語とするさまざまな民族のインフォーマントから基礎語彙の聞き取り調査を行った。調査結果はまだ整理中で、再調査を必要とする部分も少なくないのだが、調査結果の一部を本稿で紹介する。

2.本論

2.1.調査日時および方法

調査は2002年8月18日に行った。インフォーマントは先述の孔令熙氏(調査当時30歳)。積石山県の四堡子郷で生まれ育った。彼の父が回族・母が撒拉族で、使用言語は漢語のみ。彼の民族は戸籍上は撒拉族となっているが、氏の話によれば、氏の話す漢語は「回族の漢語」である。大学の四年間を寧夏回族自治区の銀川市で過ごした以外は、ずっと積石山県に居住している。調査当時は同県の石塬郷政府の共産党幹部であった。四堡子郷は大河家鎮の東隣の地区であり、厳密には氏の漢語は大河家方言とは言えないのだが、本調査はこの後に予定していた言語調査の予備調査的な意味合いを持つ。

調査方法は面接による聞き取り調査の方法を採った。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(1966)のA項目200語に相当する漢語普通話を筆者

^{注 5} 保安族については《保安族簡志》编写組(1984)、佐藤(2001)を参考にした。

が読み上げ、インフォーマントに現地漢語方言で答えてもらった。

2.2. 北京音との対応

孔氏の発音と北京音との対応関係を以下に示す。等号の左が北京音、右が孔令熙氏の発音である。

2.2.1 ◎ 声母

大河家方言の韻母は表 1 の通りである。

表 1

p = p	p = p'	m = m	f = f
t = t, tʃ ①	t' = t', tʃ' ①	n = n, ɲ ②	l = l
ts = ts	ts' = ts'	s = s	
tʂ = tʂ	tʂ' = tʂ'	ʂ = ʂ, f ③	
tɕ = tɕ	tɕ = tɕ'	ɕ = ɕ, x ④	z _l = z _l
k = k	k' = k'	x = x	
ゼロ声母 = φ, w, ɲ, ŋ, j, j, ɥ ⑤			

① [t]および[t']は齊齒呼の前ではそれぞれ[tʃ][tʃ']と発音される。

② [n]は齊齒呼および撮口呼の前では[ɲ]と発音される。

③ [ʂ]は合口呼の前では[f]と発音される。

④ [x]は「下(北京音[xia])」の場合のみ[xa]と発音された。

⑤ 「娃(北京音[ua])」は[wa]、「眼(北京音[ien])」は[ɲien]、「我(北京音[uo])」

は[ɲa]のように発音された。[j][j][ɥ]については韻母の項で詳述する。

2.2.2 韻母

大河家方言では、ゼロ声母の語における齊齒呼の介音または主母音の[i][y]音

が、摩擦を伴って極端に狭く発音され、[j]のように聞こえる。ただし、語によっては半母音の[j]のように発音される場合もある。筆者は[j][j]を同一音素の自由交替系とみなし、[j]で表記することにする。また、撮口呼でも同様に[y]音が摩擦を伴って極端に狭く発音され、[ɥ]のように聞こえる。表2では齊齒呼・撮口呼ともにスラッシュの右側がゼロ声母の時の発音である。

韻尾が[n][ŋ]の各韻母には、著しい鼻音化の傾向が見られ、語によっては明らかに[n][ŋ]音が脱落しているものもあった。今は仮に下の表2のように表記しておくが、これらについては再調査の上、表記を改める必要があるかも知れない。

下の表2において「□」で示した部分は、今回の調査で得ることが出来なかった韻母である。

表 2

ɿ = ɿ	i = ʝi / i	u = u	y = ɥu / y
ʮ = ʮ			
ɔ = ɔ, u			
a = a	ia = ʝa / ia	ua = ua	
	ie = ʝe / ie		ye = ɥe / □
ɤ = ɤ			
o = □		uo = uo, u ⑥	
ai = ε	iai = □	uai = uei	
ei = i		uei = ui, i ⑦	
au = ɔ	iau = ʝue / ue, iou ⑧		
ou = u	iou = ʝiu, ʝu / iu, u ⑨		
an = ɛ̃n	iɛn = ʝiɛ̃n / iɛ̃n	uan = uɛ̃n	yan = ɥuɛ̃n / □
ən = ɛn	in = □ / in	uən = □	yn = ɥun / □
aŋ = iɔ̃, ɔŋ ⑩	iaŋ = □ / iɔ̃	uaŋ = uɔ̃	

əŋ = əŋ iŋ = □ / iŋ uəŋ = □
 iuŋ = □ / uŋ uŋ = uŋ

- ⑥ 語彙により [uo] または [u] と発音されるが、「ゆれ」の原因については調査中である。
- ⑦ 北京音 [shuei] (水・睡) に対応する語では [fi] と発音される。
- ⑧ [iou] と発音される語 (「覺 [tciou]」「笑 [ciou]」「了 [liou]」) と、[jue][ue] と発音される語 (「葯 [jue]」「脚 [tciue]」) の二種類の対応が見られた。この違いについては調査中である。
- ⑨ 介音の [i] は弱く発音され、脱落している語もあった。
- ⑩ 声母が [f] の場合、[əŋ] と発音される。

2.2.3 声調

大河家方言では北京音の第一声と第二声、すなわち陰平と陽平が一つの声調に収斂し、三声調になっている。調値は表 3 の通りである。

表 3

平声	上声	去声
35	55	51

ただし、北京音第一声・第二声↑大河家音平声、北京音第三声↑大河家音上声、北京音第四声↑大河家音去声という対応はあくまで原則であり、この対応に従わない語は少なくない。

連続声調では平・上・去の別ではなく low tone と high tone の組み合わせが多数を占める。詳細については引き続き検討中である。

2.3. 語彙

大河家方言にはイスラム教徒特有の語彙など興味深い点も多いが、他のインフォーマントのデータと照らし合わせた上で、稿を改めて発表することにした。

3.おわりに

以上で甘粛省積石山保安族東郷族撒拉族自治州大河家鎮の少数民族話者による漢語方言の簡単な報告を終える。筆者が未熟なために不備な点の多い報告となったが、ご容赦いただきたい。他のインフォーマントに調査結果については、近日中に行えるはずの再調査の結果と合わせて、順次報告していきたい。

【参考文献】

《保安族簡志》编写組(1984) 『保安族簡志』甘粛人民出版社

侯精一主編(1997) 『蘭州話音檔』上海教育出版社

積石山保安族東郷族撒拉族自治州志編纂委員會編(1998)

『中華人民共和國地方志叢書 積石山保安族東郷族撒拉族自治州志』甘粛文化出版社

佐藤暢治(2001) 『報告書Ⅰ 積石山方言の調査報告』平成 12~13 年度科学研究費補助金奨励研究(A) 「危機に瀕した言語『保安語』における調査研究」報告書, 広島大学

唐作藩(1991) 『音韻學教程 第二版』北京大學出版社

東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所(1966)

『アジア・アフリカ言語調査票 上』東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所